

【結果】 調査期間2カ月で血培陽性60例，うち介入27例でのべ57件の提案．主な内容は抗菌薬選択21件，投与量15件，検査提案15件などで，受入は47件（82.4%）であった．

【考察】 短期の検討ではあるがAST介入によりASプロセス指標は改善傾向がみられた．当院検体の薬剤感受性は良好にて大切にすべく，抗菌薬適正使用を引き続き先生方のご指導ご協力を得て推進し，医療の質および安全の向上に貢献したい．

6. 当院での産後ケア事業の取り組みについて 4階東病棟

○廣岡 美絵 橋本 麻衣
平田 真美 山田 由貴

産後は母親の心身の状態を整え，児との生活に慣れ親子関係を構築するために大切な期間である．しかし近年，核家族化や高齢出産の増加などを背景に，産後の期間をサポートなしで過ごす母親が増加してきている．孤立した子育てが産後うつや自殺，虐待などの増加につながり社会的な問題となっている．そのため地域で産後のサポートを行う「産後ケア事業」に取り組む市町村が増え，姫路市も2016年度より開始している．当院も産後ケア事業の利用施設として開始年度より参加した．

2018年11月現在で産後ケア事業の利用者は宿泊型14名となった．また2018年度4月から通所型サービスも開始し，延べ27名の方が利用している．

当院で実施している産後ケア事業の実際の内容や，総合周産期母子医療センターとして取り組む産後ケアの重要性・今後の課題について報告する．

7. エルトロンボパグによる治療を実施した再生不良性貧血の6例

内科²（血液・腫瘍内科¹）

後藤 有基¹ 上田 怜¹
望月 直矢¹ 猪股 知子¹

久保西四郎¹ 平松 靖史¹
奥新 浩晃²

【背景】 本邦では重症再生不良性貧血はウサギATG+CsA ± G-CSFが標準治療とされてきたが，2017年8月にエルトロンボパグ（レボレード[®]）が使用可能となった．しかし，本邦では血液学的奏功と生存率で劣るウサギATGを用いる点，エルトロンボパグの使用時期がATG後2週間後とされていることが海外とは異なるため臨床経験の蓄積が重要と考える．

【方法】 2017年8月～2018年3月に当院でエルトロンボパグ治療を受けた再生不良性貧血患者6例を対象として後方視的に有効性，安全性を検討する．

【結果】 治療開始1カ月において2例で血小板数 $>20000/\mu\text{L}$ となり血小板輸血依存を離脱した．治療開始3カ月において3例に3系統の造血改善を認め血小板輸血依存を離脱したが，赤血球輸血依存を離脱したのは2例であった．重篤な血液学的毒性として1例で治療開始3カ月時点で急性骨髄性白血病を発症し治療中止となったが，非血液学的毒性はG2以下であり安全に使用できた．

【結語】 重症再生不良性貧血に対してウサギATGにエルトロンボパグを併用することが有用である症例を経験した．追加治療に関しては非血液学的毒性が少なく安全性の高い治療であると考ええる．

8. 高齢者における浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘除術の検討

泌尿器科

○前田 光毅 上田 進
西川 昌友 楠田 雄司
原口 貴裕 小川 隆義

【目的】 高齢者における浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘手術の成績の検討

【方法】 2008年4月から2018年8月で，当科において浸潤性膀胱癌に対して膀胱全摘出術お

よび尿路変向術を施行した99例を若年者群：75歳未満73例（中央値67歳）と高齢者群：75才以上（中央値78歳）の2群にわけ、術前の患者背景、周術期の因子および無病生存期間について比較検討した。

【結果】術前の患者背景として、性別・組織型・術前診断・術前化学療法・尿路変向法等を検討すると、尿路変向法のみが2群間で有意な差を認められた（高齢者群：失禁型24例 非失禁型2例 vs. 若年者群：失禁型46例 非失禁型27例, $P < 0.01$ ）が、他の因子については有意な差を認めなかった。周術期の因子としてClavien-Dindo分類による合併症の発症頻度、出血量、手術時間、および術後入院日数を検討したが、いずれも2群間で有意な差を認めなかった。術後補助化学療法は若年者群で多く施行されていた（高齢者群：1例施行、若年者群：28例, $P < 0.01$ ）。観察期間の中央値28ヶ月（1ヶ月-120ヶ月）において無病再発期間をKaplan-Meier曲線で検討したところ、若年者における1および2年無病生存率は72.8%および59.6%だったのに対して、高齢者群では64.6%および58.7%で2群間に有意な差を認めなかった（log-rank $P = 0.85$ ）。

【結論】高齢者においても浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘除術は若年者と同等のアウトカムを得られると考えられた。

9. 分娩後多量出血による母体搬送例の検討 産婦人科

○牛尾 友紀 有澤 理美
番匠 里紗 平田 智子
小山 美佳 登村 友里
中澤 浩志 西田 友美
河合 清日 中務日出輝
中山 朋子 小高 晃嗣
水谷 靖司

日本の妊産婦死亡率は周産期管理の進歩により減少し、世界トップレベルである。妊産婦死亡原因の第1位は、依然として出血であり、約

300人に1人の妊婦が多量出血による生命の危険にさらされている。分娩時異常出血に対して、1次施設では初期対応を行い、タイミングを失することなく高次施設に搬送する必要がある。周産期母子医療センターである当院は、分娩後多量出血による搬送先となるわけであるが、産科出血は、一般手術などの出血と比較して急速に全身状態の悪化を招きやすく、また、容易に産科DICを併発しやすい特徴があるため、産科医師・助産師・病棟看護師の産科スタッフのみならず、救急外来スタッフ、放射線科IVR医師、麻酔科医師、放射線技師、検査技師等と連携を行い特別かつ迅速な対処を要する。すなわちチーム医療が救命の大きな鍵である。

今回、当院への分娩後多量出血搬送例の統計、対処方法、問題点、将来への提言を発表する。

10. 憩室炎を契機に発見された後腹膜脂肪腫 の1例 外科

○河合 毅 半澤 俊哉
福本 侑麻 藤本 卓也
畑 七々子 西江 尚貴
坂田 寛之 坂本 修一
國府島 健 森川 達也
遠藤 芳克 信久 徹治
渡邊 貴紀 松本 祐介
甲斐 恭平 佐藤 四三

【緒言】後腹膜脂肪腫は後腹膜の脂肪組織由来する比較的稀な良性腫瘍である。一般的に症状が出現しにくく、増大した状態で見つかることが多い。また画像検査では悪性腫瘍を否定することが困難な場合も多く、腫瘍被膜を損傷せず摘出することが望ましい。

【症例】40代女性。右季肋部痛を30代頃より繰り返し、横行結腸憩室炎の診断で保存的加療を繰り返していた。憩室炎に対する術前精査中、造影CTで初めて骨盤内に境界明瞭で内部均一な腫瘍を指摘された。MRIでも同様に後腹膜に境界明瞭で脂肪以外の部位の信号